

看護と工学の連携

加速度センサの開発を 出発点として

看護基礎教育において、看護技術を学生に対していかにわかりやすく、かつ効果的に教授するかは、永遠の課題である。科学技術の発達に伴い、臨床現場において提供される看護技術も年々複雑かつ進化しているからである。さらに精密機器の導入もみられてきており、看護師はそれらの機器を駆使して、常に最新の情報を取り入れながら看護ケアを提供していくことが要求されている。そのような臨床現場の変化を受け、看護基礎教育においても、教授すべき内容は年々増加の傾向にある。

本焦点は、看護基礎教育における学生の技術習得を効果的に、かつ効率よく教授する仕組みを看護と工学との連携においていかに開発するかということをテーマに、筆者らが行なった研究の取り組みを紹介するものである。筆者の所属する東京有明医療大学は、2009（平成 21）年 4 月に開学した。立地する江東区は東京湾に近く、まさに海の向こうを見据えるウォーターフロントの大学として新たな知識を国内外に発信する役割を担うために、「情報」と「国際」をテーマに看護学科が出発した。筆者は、かねてから工学の研究者との共同プロジェクトを継続して行なってきたことから、新たな大学において新たな知識を開発・発信してさらなる飛躍を遂げるべく、情報分野に長けた研究者と基礎看護技術を担当する教員たちに呼びかけ、工学分野の研究者と連携する共同プロジェクトとして、看護技術習得に向けた支援システムの開発に臨んだ。

今回の研究では、人に寄り添い、対象者の健康の保持・増進や回復力を支援する看護が「サイエンス」として、まさにサイエンスの道を極める工学といかに

コラボレーションしていくのかを考え、そしてそのコラボレーションは、今後の新たな学問領域の開発につながることを確認したプロセスでもあった。焦点では工学とのコラボレーションのプロセスを紹介するとともに、協働して開発に取り組んだ看護学生のための看護技術習得支援システムの開発の一部を紹介する。さらには将来展望として、看護と工学との連携がもたらす可能性について、共同プロジェクトで中心的役割を担う研究者によるディスカッションにより、各専門分野の知識開発の重要性について議論を深めた。

このプロジェクトはまだ終わっていない。さらなるシステムの洗練・開発のために、新たな研究資金もいくつか獲得している。その成果は、学会や雑誌等にて今後も報告していく予定である。本焦点が、今後の看工連携による知識開発を促進し、専門領域も国籍も超えて研究者同士の交流を深めるきっかけとなれば幸いである。

*本研究は、東京有明医療大学特別研究費(平成 21 ～ 22 年度)の受託によるものである。

企画：金井 Pak 雅子(東京有明医療大学看護学部看護学科長・教授)